刀 肥後守秦光代

以鎖鉄作之

尾張　實之

「光代」

「秦光代」「秦光代作之」

「伊藤肥後守秦光代」

「肥後守秦光代」

「尾州住秦光代」

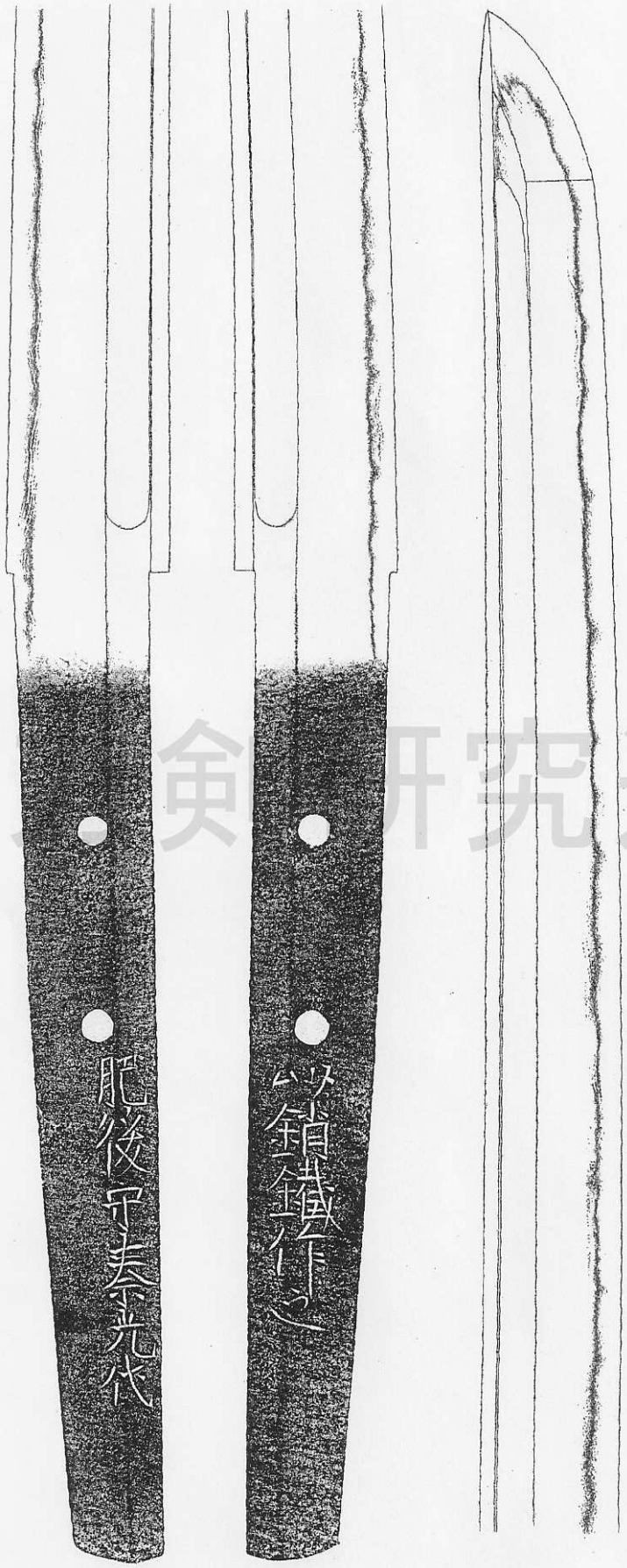
姓は伊藤。

本国 美濃国。

尾張 名古屋住。

石堂常光門。

平成二十六年四月十八日　　鑑定刀



刃長　72.7cm（二尺三寸七分九厘）　反り　1.0cm（三分三厘）　元中　3.18cm（3.03cm）　先中　2.18cm（2.12cm）

元重　0.71cm（0.67cm）　先重　0.49cm（0.45cm）　切先長　3.67cm　茎長　20.8cm（21.8cm）　茎反り　なし

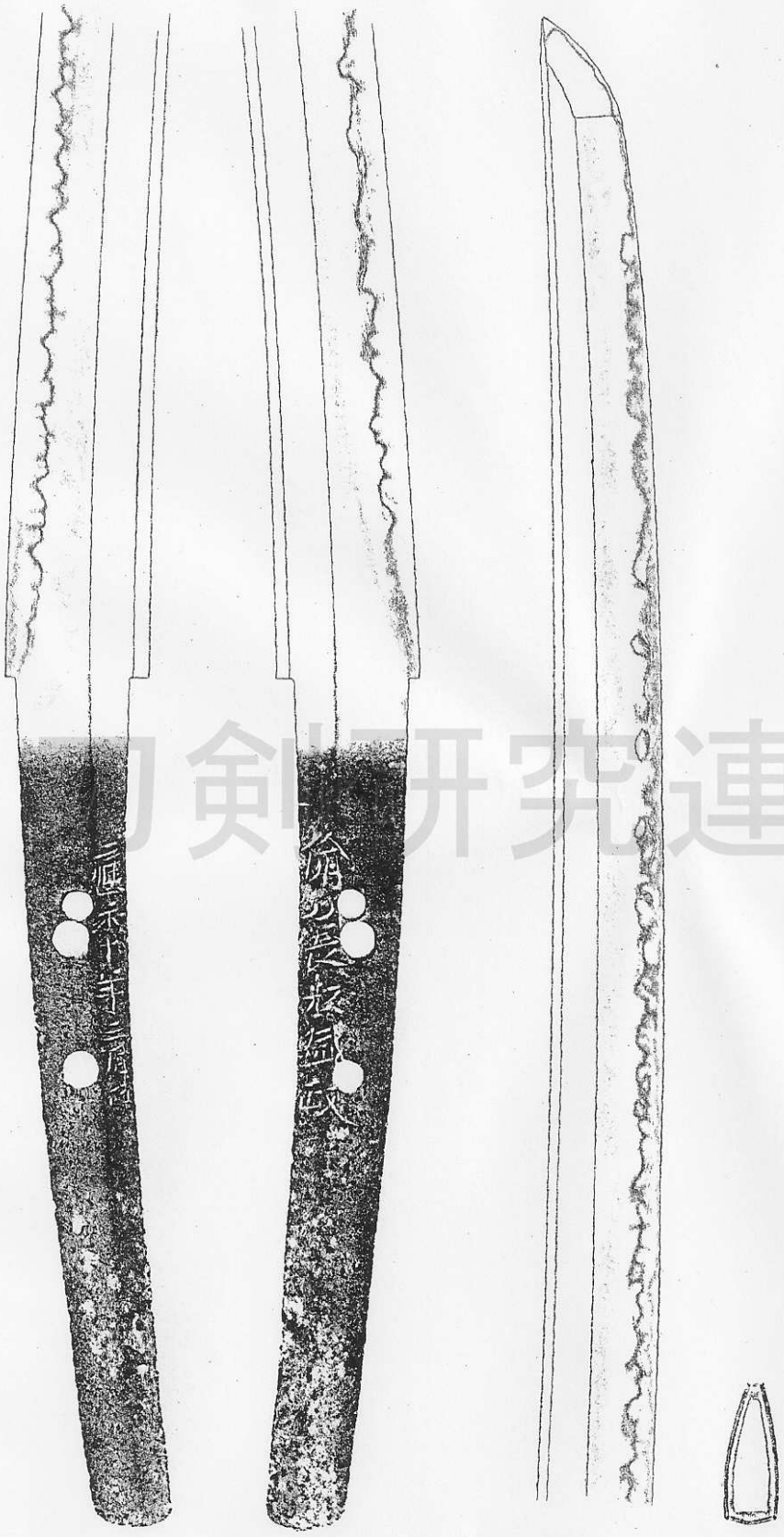
茎元中　2.86cm　茎先中（1.93cm）　茎元重　0.70cm（0.67cm）　茎先重　0.50cm（0.49cm）

鍋造、庵棟尋常、鍋中は狭く鍋は低く、重ねは尋常で身中の広い造込みとなり、先中も広く切先は中切先でフクラは尋常、反りは中間反りが浅くやや先反りを加えた延宝。天和の刀姿となる。　地鉄は小板目に板目交じりで表の区から中程までの肌が流れる。地沸が厚くつきやや肌立ちかげんに細かな地景が鮮明に表われる。地沸が結集して地斑状になり沸映りとも見える所がある。地色は黒味を帯び強く明るく冴える。　刃文は直刃、刃縁にほつれや掃掛けがあり刃中は足が入って匂口は明るく沸がよくつく。　帽子　表は乱れて先は掃けて返り、裏は浅く湾れて掃けて返る。

彫刻　表裏に丸止めの深い棒樋を鍋地にっぱいに掻く。　茎は磨上げ、およそ3.5cm程区を送る。茎の先は切捨てたと思われ、少々丸味をもった入山形に仕立てる。　刃　角｜　棟　角□　鎺目、元の鎺は勝手下り、送った部分の鎺目は切り。目釘穴は二個。銘は鍋筋にかぶせて切る。光代の長寸の一振りで（製作時は二尺五寸ほどはあったと思われる）地・刃の出来良く健全。

剣研究連盟

刀　備州長船盛政
応永十年三月日（一四〇三）
応永
備前
備州長船盛政」
備州長船住盛政」



鑑定刀

平成二十六年四月十八日

刃長　70.6cm（二尺三寸二分三厘）　反り　1.91cm（六分三厘）　元巾　2.65cm（2.56cm）　先巾　1.49cm（1.44cm）
元重　0.62cm（0.50cm）　先重　0.31cm（0.26cm）　切先長　2.02cm　茎長　11.3cm（12.2cm）　茎反り　0.25cm
茎元巾　2.26cm　茎先巾　1.57cm　茎元重　0.70cm（0.62cm）　茎先重　0.36cm（0.33cm）

鎬造、庵棟寸尋常、鎬巾は尋常で鎬は高め、身巾は狭めになった造込みで、元巾と先巾の差は開き、切先は小切先でフクラは尋常、反りは中間反りが高く先反りを加えて手元に踏張りがついた室町最初期の太刀姿となる。地鉄は小板目に杢目、所々板目が流れて総体に肌立ち、細かな地沸がつき、鉄色は青味があり、乱れ映りが淡く表われる。刃文は小湾れに小互の目、所々小丁字が交じり、刃中は小足が入る。匂口は締ってやや沈みかげんで表の物打辺りは刃がうるむ。

帽子は小湾れで先は尖りかげんに小丸に短かく返る。

茎は少々

匠を送る。鎬の仁たない肉のついた造込みで、反りが高く先がやや張り、茎尻は刃上り栗尻、刃角小肉

棟角

鑢は筋違い。目釘穴は三個。

刀剣研究連合

脇差　備州長船勝光

金象嵌　寛文五年七月十九日　山野加衛門永久（花押）　貳ノ胴截断

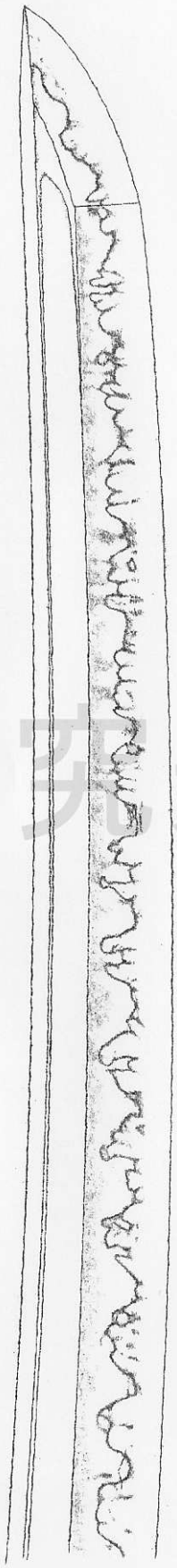
備前　文明

「勝光」「備州長船勝光」

「備前国住長船勝光」

本刀の作柄から文明・明応頃にかけて活躍しその作刀を多く残した、「右京亮勝光」の可能性がたかく、俗名を切ってはいないが入念作であることに疑いはない。

平成二十六年四月十八日　鑑定刀



寛文五年七月十九日
貳ノ胴截断　山野加衛門永久

刃長　54.0cm（一尺七寸八分二厘）　反り　1.68cm（五分五厘）　元中　3.8cm（3.12cm）　先中　2.23cm（2.16cm）

元重　0.75cm（0.72cm）　先重　0.49cm（0.47cm）　切先長　4.22cm　茎長　12.9cm（13.4cm）　茎反り　0.7cm

茎元中　2.94cm　茎先中　2.28cm　茎元重　0.85cm（0.81cm）　茎先重　0.62cm（0.58cm）

鎬造、庵棟、庵は低く、鎬中は狭めで鎬は低い、重ねは厚く身中の広い造込みで、元中と先中の差は頃合いに南き、切先は中切先が延びてフクラは枯れる。反りは中間反りが高く先反りを加えて手元に踏張りがついた、文明・明応頃の片手打て、先の身中と重ねを落とし、重心が手元になるように工夫をされた姿となる。

地鉄は小板目に板目で所々杢目を交じえてやや肌立ち、細かな地沸がつき、板目の肌に添って太い地景が底に沈んでいる。映りは乱れて穏やかに表われ、地色は青白く軟らか味があり明るい。　刃文は腰の南いた匂出来の互の目丁子で、足・葉が入り細かな金筋・砂流しを交じえ、匂口は締って明るく冴える。

帽子は乱れて先は尖り、一見焼詰めのように見えるが僅かに返る。　彫刻は表裏に丸止めの棒樋を掻く。

茎は生ぶ（僅かに区を送るか）、短かく太い茎で茎尻は丸上り栗尻、刃角ㄇ　棟区近は小丸（　）　下は𠀋門

鎬は勝手下り。目釘穴は二個。地鉄は鍛えがよく、軟らか味がある見事な鉄で刃文は匂が締って明るく冴えている。

刀剣研究連合会

脇指 播州住藤原宗長

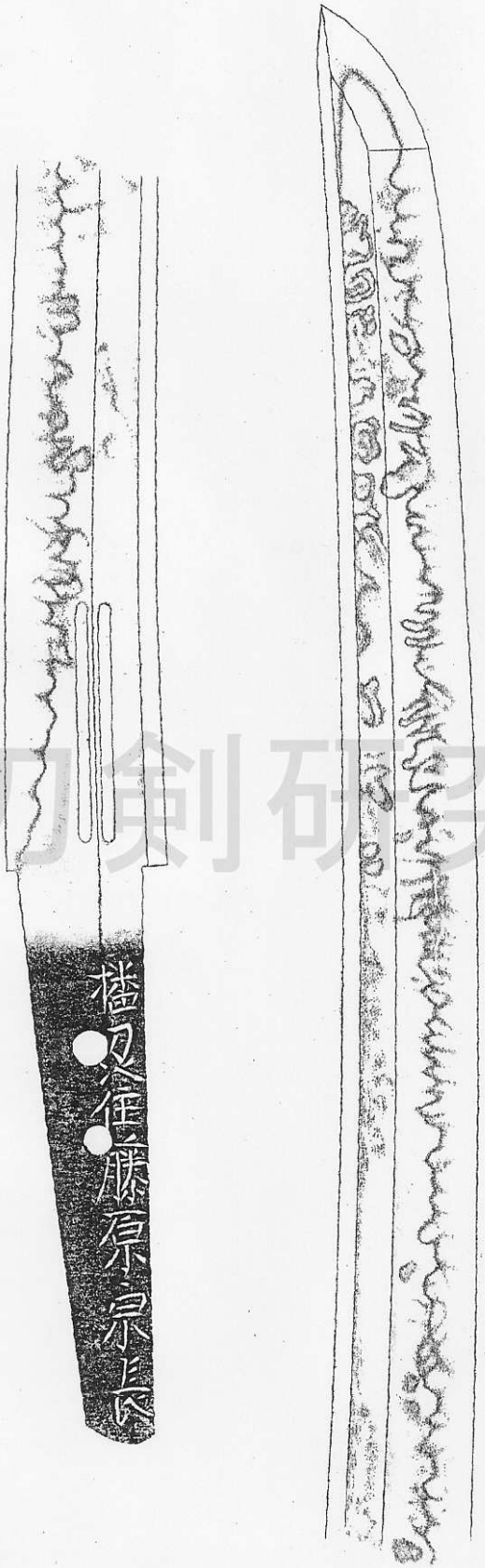
播磨 元禄。

「播州住藤原宗長」

「播州宍粟住藤原宗長」

宗永同人という。

「播州住藤原宗永」



平成二十六年四月十八日　鑑定刀

刃長 40.2cm（一尺三寸二分六厘）　反り 0.93cm（三分一厘）　元中 2.90cm（2.76cm）　先巾 1.92cm（1.82cm）

元重 0.71cm（0.69cm）　先重 0.46cm（0.46cm）　切先長 2.90cm　茎長 11.3cm（11.5cm）　茎反り 無し

茎元巾 2.47cm　茎先巾 1.36cm　茎元重 0.73cm（0.71cm）　茎先重 0.37cm（0.34cm）

鍛造、庵棟尋常、鎬中は狭めで鎬は低く、身巾の尋常な造込みで　元中と先巾の差は両き、切先は中切先が少さめで

フクラは尋常、反りは中間反りにやや先反りを加えた天和・貞享頃に見られる脇指姿となる。

地鉄は小板目に杢交じりでよく約み、棟寄り映りが表われる。鎬地は柾目が交じる。

刃文は丁字乱れで刃中は足・葉が入る。中程より上は棟焼と低焼を焼き皆焼となり、小沸がよくつき　匂口は明るく冴える。

帽子は直ぐに小丸で長く返る。

彫刻は護摩箸を表裏の腰元に彫る。

茎は生ぶ、鎬中・鎬高は尋常、先を狭め茎尻の刃方を張らせて丸味を帯びた入山形に仕立てる

刃 角 ┌ ┐ 棟 角　鑢 表裏の磨出しはやや右肩上がり、中程は切、「泰」の下辺りから勝手下り。目釘穴は二個、銘は鎬筋にかぶせて切る。

刀剣研究連合会

短刀　村正

伊勢　　大永

「村正」

「勢州桑名郡益田荘藤原朝臣村正作」

二代村正は

乱れの角度が急でけわしくなり乱れの谷が刃先にかけ出しそうになる。

また刃文が表裏揃う等の点が顕著になる。

たなご腹が強くなることや茎の先が張りかげんになることが初代との違いと、える。

鑑定刀

平成二十四年四月十八日

刃長　24.6cm（八寸二分一厘）　反り　0.7cm（二厘）　元巾　2.65cm（2.42cm）　元重　0.67cm

茎長　8.80cm（?.05cm）　茎反り　わずか　茎元巾　2.28cm　茎先巾　0.98cm

茎元重　0.64cm　茎先重　0.31cm

平造、三ツ棟棟筋の巾とおろしは尋常、重ねは薄く身巾の尋常な造込みで、反りは浅くフクラはやや枯れる。

地鉄は小板目に板目と小杢を交じえ、差裏　物打辺りの刃よりが柾に流れる。やや肌立ちながら細かな地沸が厚くつき肌に添って地景が表われる。鉄はよく練れ地色は黒味があり、明るく冴える。

刃文は角張った互の目に尖刃を交じえ、表裏の刃がよく揃い、足は刃先に抜け、砂流しを交じえる。匂口はやや締り沈みかげんで明るい小沸がつく。

帽子は乱れて先は丸く　刃方にやや突きかげんで（いわゆる地蔵帽子）長く返る。

茎は生ぶ、刃方を丸く先は細く（たなご腹）先の刃方をやや張らせかげんに茎尻は入山形、　刃　角小丸　棟　角

地・刃・健全で出来も良い。

鏡は切。目釘穴は一個。銘は目釘穴の横に独特の書風で二字銘を切る。

刀剣研究連合会